

# う め づ し ん ぶ ん 梅津新聞

(中世編⑥)

2020年  
7月10日 火曜日

常陸太田市郷土資料館  
(西二町 2186)  
TEL:0294-72-3201

## くわしくふりかえる佐竹氏の470年間(5)

### 壮絶な兄弟げんか

#### 『部垂(へたれ)の乱』

佐竹氏 16 代義舜は、戦国大名として発展するためにさまざまな取り組みを行いました。例えば、家臣団を再編成して軍事力を強化、また、戦いの際に手柄をたてながらも戦死した者を過去帳※1にのせ、その霊をとむらう儀式を毎年行うことで、兵の戦意を高めました。他にも、「中世編④・⑤」で紹介した戦いの際に、周りの武将から奪われた、または軍事的援助を受けた報酬として譲った領地の回復に努めたり、戦いの混乱の中で家臣団の領地から逃げた農民に戻ってもらったりして、佐竹氏の戦国大名としての土台を作っていました。

と、嫡子である義篤が跡を継ぎます。義篤には当主になることができない

庶兄※2の永義があり、二人の仲は決して円満ではありませんでした。そのうえ、宇留野氏の養子となっていた弟の

義元と永義が親しかったこともあり、兄弟関係は複雑でした。そしてついに

享祿2年(1529)、弟の義元が佐竹氏家臣のひとりで部垂城(旧大宮町・

現常陸大宮市)の城主小貫氏を攻略したことで、義篤と義元との対立が深まっ

ていくこととなります。

天文7年(1538)3月、義篤と義元は小瀬(旧小川村・現常陸大宮市)で

一戦を交え、翌年3月には部垂城、前小屋城(旧大宮町・現常陸大宮市)が

落城、両軍には多くの犠牲者が出るなど、ともに苦しい戦いでした。しかしま

もなく和睦が結ばれ、戦いはいったん中断されることとなります。

義篤はその後、下野国(現在の栃木県)の那須家で起こった争いに介入し

ます。そして天文9年3月にその争いから手を引くと、兵を集めて部垂城を囲み、総攻撃をしかけました。その結果義

元は自殺し、ここによくやく「部垂の乱」が終結しました。

この「部垂の乱」が起こった頃、先代当主である義舜が行ってきた家臣団編

成が強化されつつあり、佐竹氏に対抗した義元に味方する武将は少なかつた

と思われまます。そのため「部垂の乱」はかつての「山人の乱」ほど争いが長引く

ことはありませんでした。

天文14年(1545)に義篤が亡くなった後、跡を継いだのは義昭でした。

この時義昭はわずか11歳だったため、佐竹一門の南家、北家、東家の3家(いわゆる「佐竹三家」)が交代

で補佐することになりました。

当主が若く、領国を治めるのは簡単ではなかつ

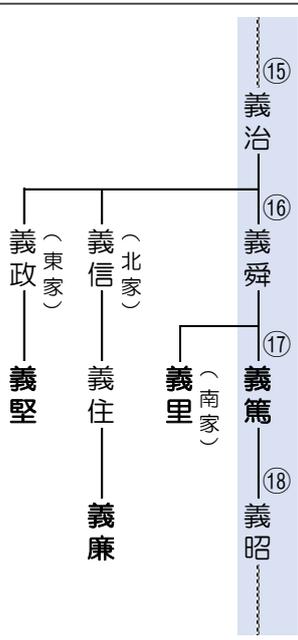
ため、各地の神社やお寺に奉加※3し、領内の安定を祈願しました。

義昭が領国内のいさかきを収めたり、周りからの侵略を阻止したりしている

一方、小田原(神奈川県)では北条氏が関東制覇をもくろみ、徐々に佐竹氏の領地に近づいてくるのでした。

※1 過去帳：死者の名簿。  
※2 庶兄：正室以外の配偶者から生まれた兄のこと。

※3 奉加：神社や寺に金品などを寄付すること。



↑天文15年 佐竹寺奉加帳(写)

↑佐竹三家略系図

# 「鬼義重」爆誕!

義昭は永禄5年(1562)当時16歳の嫡子義重に跡を継がせました。この頃の関東周辺は図1のような状態で、義重が勢力を維持・拡大していくことは簡単ではありませんでした。

関東の大半を支配していた北条氏は、永禄10年(1567)頃から常陸に進出し、佐竹氏の家臣である下妻城主の多賀谷氏にたびたび圧力を加えていました。そして元亀2年(1571)、義重が別の戦いに臨んでいるときに、大軍を率いて下妻城を攻めました。そのため義重は急きょ戦いを引き上げて戻り、下妻や岩井(坂東市)を中心に、農民をも巻き込む激戦を繰り広げることになりました。「鬼義重」と呼ばれるようになるほど勇猛果敢に戦う義重に、戦意を失った北条氏は撤退しました。

しかし天正元年(1573)に武田信玄、天正6年に上杉謙信が亡くなると、北条

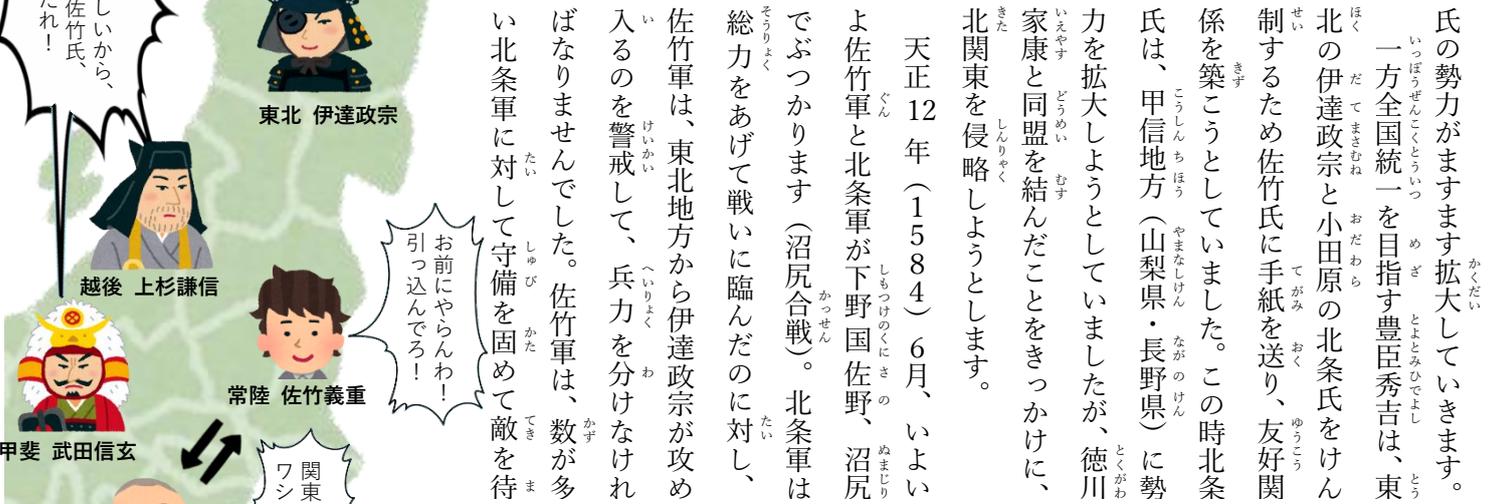


図1 義重が当主になった頃の勢力図

氏の勢力がますます拡大していきます。一方全国統一を目指す豊臣秀吉は、東北の伊達政宗と小田原の北条氏をけん制するため佐竹氏に手紙を送り、友好関係を築こうとしていました。この時北条氏は、甲信地方(山梨県・長野県)に勢力を拡大しようとしていましたが、徳川家康と同盟を結んだことをきっかけに、北関東を侵略しようとしています。

天正12年(1584)6月、いよいよ佐竹軍と北条軍が下野国佐野、沼尻でぶつかります(沼尻合戦)。北条軍は総力をあげて戦いに臨んだのに対し、佐竹軍は、東北地方から伊達政宗が攻め入るのを警戒して、兵力を分けなければなりません。佐竹軍は、数が多いい北条軍に対して守備を固めて敵を待ちます。

つ戦法をとり、敵の情勢を探るスパイを送り込んだり、伏兵をおいて敵陣を混乱させたりして戦いました。しかし戦いが長引く可能性があったため、同年7月、戦いは一時中断となりました。

実はこの時、豊臣秀吉は北条氏や佐竹氏などに対して「惣無事」(戦国大名同士の私的な戦いを禁止すること)を実現するよう努力を求めています。そして沼尻合戦が中断した後の天正12年末、秀吉と家康との間に和睦が結ばれたことから、改めて北条・佐竹氏などに「関東惣無事」の実現を求め、佐竹氏はこれを受け入れました。しかし北条氏は、一度は受け入れたものの結局反発したため、天正18年(1590)、秀吉に小田原を攻められ、北条氏は滅亡したのでした。

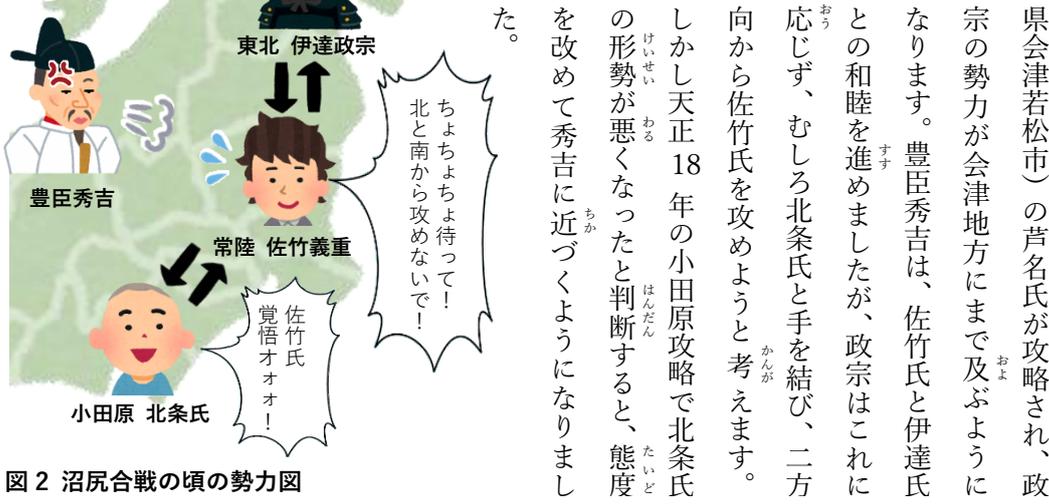


図2 沼尻合戦の頃の勢力図